

詩歌・小説の中のはきもの (第34回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

340 父は庭下駄をはいた桂子の足に目を落とした。足の甲や足首にサンダルの紐の跡がかすかに白く残っていた。そんなふうには夏の名残りをとどめた脂気のない足をみると、桂子は自分の若さの衰えを感じた。それから「今朝の秋」ということばがふと頭に浮かんだ。桂子は2つの足をそろえて父の目からも自分の目からも隠すようにした。

倉橋由美子

★『夢の浮橋』から。足に日焼けの跡があるような女性は、衣替えも早く、直ぐにブーツを履いてしまうので、靴屋の接客する店員以外はなかなか目にする事ができない。そんなこともあって小説の中に紐跡は滅多に登場しない。

341 「乗馬靴をご注文になりたい、なるほど、そして、乗馬靴は一体何にお使いになりますのでしょうか。」……
「何に使うって、つまり、まあ、馬に乗る時に履こうかと思っているわけだが。」
「なるほど、それは大変結構だと存じます。ところで、馬と申しますと、どんな種類の馬にお乗りになる御予定でいらっしゃいますか。」
「それは、まあ、商売柄、いろんな馬に乗ることになると思うが。」
「いろいろな馬でございますね。なるほど、なるほど。」

伊丹十三

★『ヨーロッパ退屈日記』から。ロンドンで乗馬靴を買おうとするとこんなインギンな質問をエンエンと受けるのだという。

うっかりロールス・ロイスなんか注文をしようものなら、「扉の外につける御紋章はいかがいたしましょうか。」と尋ねられるという。ロンドンに行ったとき、絵葉書を買うだけで済ませて来たのは正解だった。

342 最後にヒールのある靴を履いたのは、62歳のときに出席したスミス女子大学の卒業式だった。教授陣の列に向かうあいだじゅう、ヒールがぬかるみに取られ、爪先が押しつぶされそうになるのを感じた。そして、そのとき、これからは2度とハイヒールは履くまいと決心した。ヒールのある靴は1足残らず処分し、フラットシューズに宗旨を変えた。

キャロリン・G・ハイルブラン

★『六十歳を過ぎて、人生に意味があると思うようになった』から。靴は人生の「転轍機」になる貴重な商品であるというのが私の主張したいことである。ハイルブランのように断乎として別の線路を走るぞ、と決意して靴を処分するなら許せる。しかし、大抵の人は「ハイヒール履くをやめしはいつなりし足はゆったり大きくなりぬ 伊東紀美子」ということになるのであろう。

343 靴職人(コルドニエ)という修道会がある。それは靴を作ることによってまとまっている修道僧の共同体だ。彼らはむかしの使徒たちのように、自分の手の労働で暮しをたてている。詩篇を歌い、革を打っているが、そのふたつは両立しえないものでもない。同時に祈りかつ労働することは可能なのだ。一般の修道僧は労働と祈りとを分離してきた。靴職人

修道士は、宮殿住まいの閑な修道僧よりも、イエス・キリストの弟子たちのほうにずっと似かよっている。

ルイ＝セバスチャン・メルシエ

★『十八世紀パリ生活誌(原 宏訳)』から。誠実な修道士たちは評判のいい靴を作ったという。キリスト教にはクリスピンという聖人がいて、靴屋の神様になっている。日本にも仁王、不動明王、韋駄天などの足の神様がいますが、靴屋や靴店にその写真やお像が祀られているのを見たことはない。ただ、足の神様・子の権現を信仰する靴屋だけでつくる講中があり、私はその講中に加わり、1度だけ参詣したことがある。

344 その時点で私が考えていた問題は、「2年間もの連続使用ののちに左右の靴ひもが28時間以内に相次いで切れたのは、いったいなぜであるか?」ということであった。結びの作業に入る前にまずひもの両端を持って引っぱったときの感触をもう1度思い起こしてみる。このとき摩擦を受けるひもの長さは、およそ1インチほどだろう。それを2番目の引っぱり、最初の¹に比べてかなり強い本格的な引っぱりと比較してみた。2度目の引っぱりの際には、基本の平結び目を引き締めるために、1度、ことによると2度、床方向にかなり強く引くことになる。
ニコルソン・ベイカー

★『中二階(岸本佐知子訳)』このあとも更に30数行も靴ひもについての考察が続く。第2章は「左の靴ひもが切れたのは、昼休みの直前だった」という文章から始まる。「靴は、我々が最初にマスターしなければならぬ大人の装置だ。靴ひもの結び方を教わるとするのは、たとえば大人が皿洗い機に皿を入れるのを横で見物していたら、優しい声で、皿洗い機のドアを閉めて、つまみ(ギリギリといやな音を立てる)を“洗う”のところ¹に回す仕事をやらせてあげようかと聞かれるのはわけが違ふ」とベイカーは言う。この極微的文学『中二階』は、ハウィという男が、切れた靴ひもをドラッグストアで買い、オフィスに戻ってエ

スカレーターに向かって足を踏み出すところで始まり、エスカレーターを降りて中2階に降り立つところで終わる。『ユリシーズ』も顔色を失うというたった数10秒ほどの短い時間を書いた長い作品である。

345 「さらには衣服と靴を」と彼女は言った、「食らいかつ飲むものを、住むべき家を、妻と子を、畑と家畜を……」この言葉を聞くとしかし、老いたるヨハン・ブッデンプロック氏は、いきなり笑いだした、口をゆがめた忍び笑いながらきんきんとひびく声で、実はそれまでにこっそりと用意していた笑いなのであった。
トーマス・マン

★『ブッデンプロック家の人々』の冒頭。8歳の孫娘は問答示教書をつっかえながら祖父の前で暗誦してみせる。「われ信ず、神われを生きとし生けるものなべてとともに創りたまひしことを」に続いて「靴」が出てくるというのが凄い。西洋の神様は「靴」まで生み出しているのだ。もっとも現世の利益と快楽を追求した老祖父は、神聖なものを茶化してよろこんでいるのである。

346 地下足袋の指にしごける草の実の音して飛ぶも秋はたけなわ
石原 正

★『朝日歌壇 秀歌選』から。地下足袋は、主に畑、山林、草地などに履かれる。雑草の繁る道など歩いて行くと、指股に草が引っかかる。それをしごいていく快感を思い出させてくれる歌である。ぬかるんだ道では指の間からヌルヌルと土が抜け登ってくる。まだそんな幸せな歩行を楽しんでいる人がいるのである。

347 「スリッパはどこにありますか?」
近くにいた若い店員に尋ねた。
「スリッパは片方では使えません。スリッパーズというべきです。ちゃんと、いつてみて」
店員が客に向かっていう科白とは思えなかったが、世界の共通語ともいえる英

語を話す国民としての自負心なのだろう。私はしぶしぶいい直した。

「ベリー・グッド！ では、こちらです」

店員はコーナーまで、案内してくれた。

古勝信子

★『続 女ひとりロンドンを駆ける』から。ブーツでもシューズでも語尾にSをつけた複数で呼んでおきながら、スリッパは単数で呼ぶのは確におかしい。店員が客に言うセリフじゃないというが、「ゴード」という客の言葉を「英語のヤギですからゴートです」と言って、それがきっかけになって、商品知識の豊富さを認められた店員のいたことを私は知っている。

348 1年に1回、秋の終り、修吉たちの学校に18足の新品ゴム長靴が届く。そしてあくる朝、1学級に1足ずつその新品ゴム長靴をさげて担任教師が教室に入ってくる。すると教室にえもいわれぬゴムの匂いのする風が微かに吹くのがあった。…どうにかして当らないか修吉たちは切ない思いで、あのゴムの匂いのする風を嗅ごうとして鼻をひくひくさせた。

井上ひさし

★『下駄の上の卵』から。太平洋戦争中、東北地方では長靴が籤引きで配給されていたのだ。私の疎開していた茨城県では長靴ではなく、ズック靴であったが、そのゴム底の匂いに胸をときめかせたものだ。間もなくアメリカの飛行機が襲来するようになり、落として行った合成樹脂を机でこすると、今まで嗅いだことのない外国の匂いがあったので、ゴム底の匂いは淡い記憶になってしまった。

349 江戸時代に「てりふり町」と称した町があったそうで、これは現在の東京中央区小舟町1丁目・芳町1丁目・小網町1丁目に相当するようだが、このあたりは、かつて傘屋とか履物屋が多かったところから、「照れ」と祈り「降れ」と祈って天候を気にし、それで「てりふり町」と言ったらしい。

山川静夫

★『歌舞伎の知恵』から。寺山修司の歌に「大工町寺町米町仏町老母買ふ町あらずやつばめよ」というのがある。その他鉄砲町、弓町、鍛冶町、革屋町などがあったのだから下駄町や沓町だって探せばあるかも知れないと思って、全日本地名辞典（96年版）を調べたがなかった。因みに米町と仏町は寺山の創作で皆無、大工町は22、寺町は41もある。外国にはカーペンター（大工）だのシューメーカー（靴屋）、スミス（鍛冶屋）、メイスン（石工）などという姓があって、ごく当たり前の扱いを受けているのを考えると淋しい。

350 いま振り返ってみると、わたしのこれまでの人生は、あの日あのときを軸にして静かに回っているのだとわかる。わたしは子供用の靴の店、〈ストライド・ライト〉で、どの靴を買おうかと考えていた。黒か紺の革靴にすれば、ハンナの通園用にそろえた服がどれでも合うだろう。ある形の靴を選び、その黒と紺色の手にとって訊いた。「どっちがいい？」ハンナの心はもう決まっていた。

「あたしの靴は、これ」ハンナはストラップのついた赤いエナメル靴の手にして、きっぱりと言った。

わたしはいらだちを抑えてほほえんだ。

マリア・ハウステン

★『赤いくつのハンナ（宮内とも子訳）』の冒頭。そして最後はこう結ばれている。「ハンナの赤い靴は、ベッドの下の箱には2度と戻らなかった。それはマデリンの足もとでこつこつ音をたてて踊りつづけ、爪先のエナメルがすりきれ、ストラップがバックルのところでちぎれ、かかとがほとんどなくなるまで履かれ、天寿をまとうした。あの赤い靴はいまでもわたしの心に生きていて、ハンナの澁刺とした精神を時を越えて甦らせつづけている。」。小説にせよ、随筆にせよ日本人には書くことができない構成である。

351 中川履物店 扱うのは下駄、草履、サンダル、傘、それに杖である。年寄り向けの品揃えにふさわしく、店はじいさ

んばあさんの2人でやっている。鼻緒のすげ具合がいいと評判で、高円寺から引越してもわざわざこの店に通ってくる年寄り客がいるほどである。もちろん正一のばあさんも、ここでしか履物を買わない。息子がいるが勤め人で、あとを継ぐ気はないらしい。「お宅はいいねえ」と、中川履物店のばあさんはいつも正一のばあさんに愚痴をこぼすのである。

戸越シューズ 靴屋といっても革靴よりは月星印の運動靴やサンダル、ビニールの普段履きが中心である。おやじさんはいつも月星印前掛けをして、奥で靴底の張り替えをやっている。

ねじめ正一

★『高円寺純情商店街』の「加盟店名簿」から。高円寺北口のパツとしない江州屋乾物店を中心に物語は展開する。この店の隣りは魚政、その隣りが中川履物店で、おたふく印の茶色っぽいサンダルを山積しその横に杖を並べている、いかにも年寄り臭い店だったという。魚屋の隣りで履物をおるのはつらいが、こんな商店街には人情がありました。私たちが安さと品物の豊富感を求めているうちに、「いらっしやいませ、こんにちは」と機械的に若者が繰り返す店を利用するほかなくなってしまった。年配の商人と人情は小説の中にのみ存在する。

352 だれか上の階の住人が帰ってきたらしく、コンクリートの階段をあがってゆく靴音が聞えてきた。別に酔払っているようでもなく、むしろ深夜の帰宅を遠慮するように1段ずつ静かに踏みしめているのだが、そのコツコツという靴音が、思いがけなくはっきりと私自身の中でひびき返った。

やがて階段の靴音は途絶え、私のなかのその反響もゆっくりと消えて行って、あとにぽっかりと空洞のような沈黙だけが残った。自分のなかに確かな何かがあるとは、かねて思っていなかったが、こんなに気味悪いほどからっぽとは思わなかった。

日野啓三

★『私のなかの他人』から。真夜中の靴音というのはいろいろなイメージを運んでくる。はきものの記事を漁って活字とにらめっこして、目から入ってくる情報ばかりをパソコンで処理していると、何か頭がバサバサに乾燥してくる。そんなときに聴く靴音というのは、生きたものに接する温かさすら感じるのである。酔ってドタドタと立てられる深夜の靴音でも私は厭わない。